

## 博士論文要旨

学籍番号	1210001	氏名	橋本麻由里
論文題目	新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学びとその発展に関する研究		
<p><b>目的</b></p> <p>新任期にある学士課程卒業者（以下、大卒新任者とする）の看護実践経験をもとにした学びと学びの発展を明らかにし、看護実践経験をもとに自ら学び続ける看護専門職育成のための、学士課程教育及び医療現場の人材育成のあり方を提言することを目的とする。</p> <p><b>方法</b></p> <p>本研究は、3つの研究で構成する。研究1は、大卒新任者（卒後2～3年目）6名への2回の半構造化面接により、看護実践経験をもとにした個々の学びと学びの発展を質的記述的に分析する。看護実践経験をもとにした学びは、その経験において取り組んだことと看護について得たことにより明確化する。研究2は、研究1の個別分析結果を統合し、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びとその意味を明確化する。研究3は、研究対象者の所属施設の看護部教育担当者(3施設)への半構造化面接、病棟教育担当者(1施設)のグループインタビューより新任者育成の取り組みの現状と課題を捉える。以上より、看護実践経験をもとに、自ら学び続ける看護専門職の人材育成のあり方を考察する。</p> <p><b>結果</b></p> <p>研究1：大卒新任者は、2回の面接により各々3～6つの看護実践経験を語った。また、看護でできることは何か、対象者の思いに焦点を当てた看護、自分の看護に対する考えや課題、仕事の拡大に伴う責任について看護実践経験を重ね、学びを進展させていた。</p> <p>研究2：大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びにおいて取り組んだことは〔試行錯誤しながら、自信のなさや不確かさに対処し自立への道を探る〕〔対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する〕〔看護師としての責任や使命感を意識する〕〔他者と協働して実践を前に進める〕〔実践をもとに、次の看護に向けて自分を進めていく〕〔自分の成長や実践力を向上する〕であった。また、看護について得たことは《命を守る看護師の責任の重さ》《これまでは見えなかった対象者への深い理解》《見通しや根拠を考え、確実に看護を実施するための必要性や準備方法》《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》《受け持ち看護師としての患者の問題解決に対する責任》《1人ではなくチームで実践に取り組むということ》《看護に対する“できる”という手応え》《自分の成長のための目標や機会・方法》であった。</p> <p>研究3：各施設は、全体で新人を支援する体制作り、育成計画の可視化、教育担当者育成に取り組み、支援体制や教育担当者が機能すること、OJTとの連携、個別性や主体性を活かす育成方法が課題であった。また長期的視野で新任者の成長を捉え、2年目以降は能力向上への主体的取り組みを求めている。</p> <p><b>考察</b></p> <p>看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職育成のために、学士課程では利用者中心の看護の理念、自己を育成する責任と方法、他者と共に取り組む意義と方法を学ぶこと、医療現場では、試行錯誤ができる周囲の人々との信頼関係、看護師として患者・家族の看護に責任をもつ体制とその支援が重要である。よりよく看護を実践するための取り組みや看護について得たことから、取り組みの意味を創出し、看護実践の目的や根拠、課題をつかむことが、学び続けることを促進すると考える。</p>			

(別記様式7)

番 号 :

平成 27 年 2 月 16 日

## 平成 26 年度博士論文審査結果報告書

主 査 服部律子  
副 査 黒江ゆり子  
副 査 北山三津子

平成 26 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

### 記

学籍番号：1210001

氏 名：橋本麻由里

審査結果： ○ 1. 合格      2. 不合格      3. 保留

#### [審査結果要旨]

(1,000 字以内)

論文題目「新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学びとその発展に関する研究」は、新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学びとその発展を明らかにし、実践経験をもとに学び続ける看護専門職育成のための学士課程教育及び医療現場の人材育成のあり方を探究した研究である。

学生は、第一に大卒新任者を対象に面接調査を行い、看護実践経験をもとにした個々の学びとその発展を質的帰納的に分析し、実践において取り組んだことと得たことを明確にした。第二に、個別の結果を統合することにより、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びとその意味を明確にした。さらに第三に、当該大卒新任者が所属する施設の看護部教育担当者を対象に面接調査を実施し、新任者育成の取り組みの現状と課題を明確にした。これらを通して、自ら学び続ける看護専門職の人材育成のあり方を考察した。

その結果、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びは、思考錯誤しながら不確かさに対処し自立の道を探ること、対象者の思いに焦点を合わせた関わりを模索する等の取り組みが行われ、それらの取り組みが、根拠を考え見通しをもって確実に看護を実施する重要性の認識とその方法の修得等に繋がっていることが示唆された。また、看護部の教育は、全体体制による新人支援のもとで技術習得・対象理解の能力向上等を目指した教育が行われていることが明らかにされた。

これらの過程は的確にデータ化され論述され、新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学びに関する理論構築に資する研究として高く評価できる。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。当該学生は審査委員会に3回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。